

農楽部 畑っこ

上奥華・渡邊伶菜（環境人間学部 食環境栄養課程 3 回生）

キーワード：農業，多世代交流，地域交流

1. 団体概要

畑っこは、環境人間キャンパス内にある畑で毎週水曜日に活動している学生団体である。

「農を楽しむ」をコンセプトに、在来種の保存も目指しながら、地域の方々とたくさんの野菜、果物を育てている。旬の野菜を収穫し、みんなでおいしい調理方法を共有している。畝（うね）を作るところから、調理し、食べるまで、食の一連の流れを体験することができる。

現在は 3 回生 5 人，1 年生 10 人の計 15 人で活動している。

栽培に関しては地域の方々の協力のもと、単に野菜を栽培し収穫することを目的とするのではなく、種を採取し次年度もその種を栽培できるサイクルを生み出している。さらに、種の保存だけでなく伝統的な農作業の方法も学生に引き継いでいる。畑っこでは昔ながらの農具を使い、種まき、収穫、そして調理して食べるまで、食の一連の流れを体験することで「鎌と鍬さえあれば食べていける」ということを学んでいる。

2. 2024 年度の活動について

表 1 に今年度の活動内容をまとめた。毎週水曜日に畝づくり、種まき、草引き、水やり、収穫を主に行っている。また、今年はエコフェスで模擬店を

出店した。収穫した六条大麦を焙煎して作った「麦茶ラテ」と、畑で収穫したじゃがいもを使った「じゃがいもドーナツ」を販売し、多くの方に環境人間キャンパス内の畑の存在や、在来種、畑っこの活動について知ってもらう良い機会となった。

ほとんどのメンバーが今年から加入したため、畝の作り方、種をまく間隔、水やりの頻度など、分からないことが多く、地域の方々に助けていただきながら活動を行った。

今年度は、在来種の栽培や田植え、収穫したもち米を使った餅つきなど、様々な活動を行うことができた。その中でも最も印象に残っていることは、いちご狩りを行ったことである。いちご狩りと言うと、毎春になると遠方までしに行く方も多いと思う。いちごを育ててみて一番驚いたことは、いちごの苗の増え方である。いちごの苗にはランナーというものが生えていて、最初に植えた親株から発生したランナーが土壌に接すると子苗ができ、その子苗からまたランナーを通じて子苗ができてどんどん増えていく様子を観察することができた。いつも既に行っているいちごしか見たことが無かったので、いちごがどのように増えていくのかを学ぶことができた。

11 月にはこんにゃく作りも行った。こんにゃくいもは他のいもとほぼ同じ見た目だが、間違えてそのまま食べてしまうと大変なことになるため、一度こんにゃくいもを植えた畑はその先他のものを育てないようにしなければならないと学ん

表 1 2024 年度の活動

4 月	新入生勧誘
5 月	いちご狩り
6 月	田植え
7 月	エコフェス出店
8 月	夏野菜の収穫
9 月	にんにくの収穫
10 月	もち米 稲刈り
11 月	こんにゃく作り
12 月	もち米 脱穀

（出所）執筆作成



写真 1 いちご狩りの様子



写真2 田植えの様子



写真3 エコフェスで作成したチラシ

だ。こんにゃくを作るという初めての経験で分からないことばかりだったけど、地域の方に教えてもらい、美味しいこんにゃくを作ることができた。

3. 活動を通して学んだこと

今年度は、昨年度に栽培した野菜の種を採取し、それを使って野菜を育てることができた。

活動の中で、食材を無駄なく使い切ることの重要性も学んだ。例えば、大根の葉など普段捨ててしまいがちな部分も調理して食べる工夫を行った。また、残った食材は堆肥として活用し、再び畑に還元することで、循環型の農業を実感することができた。

種を保存し、育てることを実践したことで、食に対する考え方が大きく変わった。普段私たちが野菜を購入する際はスーパーやJAなどの場所できれいにされたものを購入することが多いが、実際に育てることで、その植物の成長を近くで見ることができ、花やくきの部分など、購入する際には見えない部分まで学ぶことができた。

さらに、大麦、もち麦の雑穀や豆類の収穫後に行う手作業の選別や乾燥工程を経験し、日々食べている食品がたくさんの人の手をとおり、どれほどの手間を経て食卓に届いているかを改めて認識することができた。

他にも、天候や土壌の状態が野菜の成長にどれほど影響を与えるかについて身をもって体感した。特に今年は、長雨や高温の影響で一部の野菜が想定通りに育たず、収穫の時期が遅れることもあったが、その都度試行錯誤を重ねることで、自然相手の難しさとともに工夫する楽しさを学ぶ機会となった。

今後は、この活動で学んだことを活かし種の保存や循環型の考え方を取り入れた生活を心掛けることで、環境にも配慮した持続可能な暮らしを目指していくつもりだ。

4. 今後の展望

第一に、在来種の栽培をし続けることで、野菜の多様性がなくなってしまうことを防ぎたい。また、兵庫県の在来種にどのようなものがあるのかをもっと地域の多くの人に知ってもらいたい。そのために今後は、活動を広げるために昨年度の野菜以外の野菜も自分たちで提案し、より様々な野菜を栽培していきたい。また、在来種について自分たちで学ぶための講習会の時間を作り、学生間での在来種の知識をもっと深めたい。

他の学生団体でも「農業」や「無農薬」、「在来種の保存」について興味がある学生団体があれば、協力し、互いに学びあうことができるような機会を作りたい。